

扇の発展に見る東アジアにおける文化の伝播と創造

王 岩

岡倉天心は、「アジアは一なり」と述べ、一つのアジア文明の存在を見出そうとした。とりわけ東アジア諸国の人々の間には、長い期間に亘る文化交流の結果、文化の共通性（類似性）というべきものが形成されてきたと思われる。文化というのは、基本的に後天的に学習されてゆく個々の言語、慣習、行動様式、価値観などの一組の束のことを意味するものである^{〔1〕}。つまり、文化というのはまさに生きている物なのである。一つの国や民族から発信された文化が、他の国や民族に伝承・受容される過程において、またその民族独自の精神によって学習され、再創造されていくものである。

中国は長い間、東アジアにおける文化の輸出の担い手となって、水稲、粟、養蚕や陶磁器、暦、建築など多くの技術のみならず、文学、哲学、宗教、美術などの文化を東アジア諸国に伝入させた。日本の場合は、自国の固有の文化を創造する一方で、中国に遣隋使、遣唐使を派遣し、中国から多様な文化を摂取することを積極的に行った。しかし、日本の明治維新を分岐点とし、文化の伝播の主流は逆転されることになる。二十世紀初期の中国における日本留学ブームには、日本を通して西洋文明を取り入れようとする当時の中国の姿勢がみられる。

この長い文化の交流においては、東アジア各国はお互いを師匠とし、文化のインタラクションを通じて、外来文化を伝承・咀嚼しながら、独自の文化を創造する過程が有効に機能してきたといえるだろう。

日本で生まれたとされる扇はその好例である。隋唐時代の中国から輸入した団扇から創案された摺扇は、十一世紀ごろ中国に輸出されるようになった。そしてそれを元に中国で再度工夫された、「唐扇」と呼ばれる扇は、再び日本に逆輸出されるようになる。このコンパクトな扇から巻き起こされたのは、実は中国と日本、朝鮮など東アジア諸国文化交流の大きな風であるとも云えるだろう。

一 中国を起源とする団扇

『古今注』によれば、扇（五明扇）をつくったのは舜であり、殷代には雉の羽を使った雉尾扇があったという記録がみられる。王嘉の『拾遺記』においては、周昭王の時、「孟夏取鵲翅为扇」という記録も残っている。これらの文献から、扇は中国では三千年余の歴史がある



図1 中国・唐 閻立本『步輦図』(局部)

と推定し得るだろう。
『新唐書・儀衛誌』においては、扇は朝廷の威儀を表す道具として記録されている。

太皇太后、皇太后、皇后出、尚儀版奏「請中嚴」。……偏扇、團扇、方扇皆二十四，宮人執之，衣彩大袖裙襦，彩衣、革帶、履，分左右。……宮人執之，服同執扇。次內寺伯二人，領寺人六人，執禦刀，服如內給使，夾重翟車。次腰輿一，執者八人，團雉尾扇二，夾輿。次大繖四。次雉尾扇八，左右橫行，為二重。次錦花蓋二，單行。次小雉尾扇、硃画團扇皆十二，橫行。

また、儀式・權威を表す長柄扇は唐の名画『步輦図』や宋代壁画などに見られる。

この絵では、唐太宗は輦車に座って、九人の宮女は扇を持つたり、傘をさしたり、輦車を持ち上げたりするなどして、唐太宗の前後左右に伴う風景が描かれている。
このほかに、団扇は多くの文学作品に

も現れている。西漢の班婕妤（公元前四八年—二年）の書いた『團扇歌』においては、自分自身を団扇と喩え、男尊社会における女性の宿命を嘆いたものがみられる。

新裂齋紈素，鮮潔如霜雪。
裁為合歡扇，團團似明月。
出入君懷袖，動搖微風發。
常恐秋節至，涼飆奪炎熱。
棄捐篋笥中，恩情中道絕。

『團扇詩』は中国の後世の宮怨詩に大きな影響を与え、唐代の名高い詩人王昌齡の書いた『長信秋詞』にも類似した表現がみられる。

奉帚平明金殿開，
且將團扇共徘徊。
玉顏不及寒鴉色，
猶帶朝陽日影來。

団扇は中国文明の産物として、隋唐時代に東アジア諸国に伝えられたとされている。それは東アジア諸国における多くの文献や資料などからもうかがうことができる。団扇の日本への流入は、聖德太子が派遣した遣隋使によって豊かな中国文明を摂取すると同時に日本にもたらされたと考えられる。

日本における扇に関する文献としては、『万葉集』に収録された柿



図2 中国・唐 周昉『簪花仕女图』(局部)

本人麻呂の忍壁皇子に献れる歌や奈良時代の宮中持扇などが最も初期のものと考えられる。

『万葉集』巻九：忍壁皇子に献れる歌一首——仙人の形を詠めり

常之倍尔 夏冬往哉 裘 扇

不放 山住人

とこしへに 夏冬行けや 裘

扇放たぬ 山に住む人

この歌は仙人の絵をみんなで見ている中で、人麻呂が絵に描かれている仙人の姿をみて——夏に用いる扇と冬に着るような皮衣を同時に身に着けていること讀んだ歌であるとされている。

『続日本紀 卷第二十四』

これに賑給す。○丙寅、御史大夫文室真人淨三、年老い力衰へたるを以て、優詔して、特に宮中にして扇を持ち杖を策くことを聴したまふ。

同じ『続日本紀 卷第二十四』補注

高齢の臣下に杖などを賜う例としては、(中略)などがある。扇(この場合大型の団扇のごときものか)について、暑月(四月)に行われる旬儀で王卿に扇を賜うことが平安朝の儀式書に見られるが、とくに高齢の臣下に賜うという例は見当たらない。

『万葉集』や『続日本紀』など文献に見られた扇は一般的に中国式の団扇であると推定されている。用途としては、儀式の道具として使われている共通点が見られるが、同時に文学作品から描かれた団扇はさまざまな意味で用いられていることが分かる。

二 日本における摺扇の発明について

団扇が最初に中国において発明されたものであるということには異論は少ないと思われる。しかしながら、現在よく使われている折り畳み式の扇はどうだろうか。

『日本国語大辞典』によれば、扇は平安前期の日本において発明されたものと考えられると明記されている。しかし、実は折り畳み式の扇がいつから現れたのか、またどの国で最初に発明されたのか、これは長い間議論されてきた問題である。これまでの研究によれば、日本説、高麗説、中国説の三つが有力な説と考えられている。

日本における折畳式の扇は素材から檜扇と蝙蝠扇という二つの種類に分けられる。伝説では神功皇后の朝鮮出征のときに蝙蝠をみてその羽の形にならったとする説があるが、扇が日本において発明されたと考えられる有力な根拠としては、筆者は平城宮跡で発掘された檜扇の

実物が重要であると考ええる。

奈良県奈良市の長屋王邸から出土した最古の檜扇とされるものが、七四七年の年号が記された木簡と一緒に出土していることから、檜扇の出現は奈良時代（七一〇～七九四年）に遡れると考えられる。

十世紀に源順に書かれた『倭名類聚抄』には、扇（和名阿布岐）と団扇（和名宇知波）とを区別しているから、日本の平安中期において、中国式の団扇とことなる折畳式の扇が存在したことが分かる。

扇の歴史に関する文献をひもといてみると、『宋史』巻四「日本伝」には日僧の裔然が北宋端洪元年（九八八年）に弟子喜因らを遣わして、数多の宝物を宋帝に献じた記録がある。その献上品リストに「檜扇二十枚、蝙蝠扇二枚」が入っている。

金銀時繪扇筥一合、納檜扇二十枚、蝙蝠扇二枚

つまり、宋帝から貴重な大蔵経をもらった日僧裔然は扇を日本の土産として宋帝に贈ったことが推測できる。

扇を日本の土産とする例は、中国明の薛俊の纂述した『国朝典故卷之一百三』の「日本国考略」からも見られる。中国明の薛俊の纂述した『国朝典故卷之一百三』「日本国考略」において、扇が金、銀、琥珀、硫黄、水銀、銅、丹土など29種類の特産品として、日本の「土産略」に並べられている。

宋江少虞『皇朝類苑』は当時中国にもたらされた日本扇について、「淡粉画平遠山水、薄傳以五彩、近岸為寒蘆蘆蓼、鷗鷺佇立」と記している。

北宋の名高い文人蘇轍は『楊主簿日本扇』を題する詩で、「扇は日本より来たれど」と詠んでいる。

扇従日本來、風非日本風。風非扇中出、問風本何従？風亦自知、當復問太空。空若是風穴、既自與物同。同物豈空性、是物非風宗。但執日本扇、風來自無窮。

しかし、檜扇の起源を探究してみれば、扇は日本の独創品だとは断言できないと考えられる。

檜扇の起源については、いくつかの見方があるが、筆者は平城京跡で発掘された檜扇は形状、寸法、墨書などは木簡とほぼ類似していることから、木簡と大きなかわりがあると考えている。

また、檜扇と木簡は外形だけでなく、筆記用具としての用途という点においてもかわりが大きいだろうと推測している。

古代中国で漢代までは木簡が筆記用具としてよく利用されていた。帛、紙に代替されることになったのは漢代以降のことである。また、数枚の木簡で書き記す場合は、その順序を分かりやすいように、よく数枚の木簡を短冊形に綴っていたのである。日本木簡の源流は狭長な短冊形を基本形としている中国簡牘にあると考えられる。



図3 遺した出土した平城京跡に日本檜扇⁽²⁾

狩野久は平城宮跡で出土した木簡について、次の説明を加えている。

「平城宮跡で出土した考選木簡は、官人の考選に関する整理カードといつてよいものであるが、上方側面に孔を穿つて同種のものを連ねる形が想定される。孔の位置には墨罫線を描いており、これなどは特定の寸法で作成されたものであろう。また、文書木簡のなかには、上方または下方に小孔をあけるものがあるが、これは文書木簡を受け取った先で、木簡整理の一方方法として、同一内容のものを一括するためにあけたものと考えられ、檜扇形に綴つて、検索に便ならしめるための処置と判断される。」^③

もともと公卿、男子用の檜扇は素地であつて、記録の必要がある場合、そこに要項を記していたといった用法においても、木簡と一致しているところがある。

したがって、形状や機能から見れば、檜扇は中国の木簡や簡牘を元に考案されたものと推定できるのである。木簡や簡牘の源は中国にあるというのはいままでもないが、それをもとにして、折り畳み式の扇が日本で創案されたものであると考えられる。

二 高麗扇と倭扇

一方、扇の起源に関しては、高麗において発明されたとする説もある。中国の国語辞典『辞海』によれば、「摺扇」の項目に「朝鮮より出で、宋の時すでに中国に入った」とある。また、中国の多くの文献

は高麗の「松扇」、「白摺扇」、「摺疊扇」、「撒扇」、「摺迭扇」、「聚頭扇」などに言及している。前述した『宋史・日本伝』をふまえると、ほぼ同じ時期—宋代に高麗の扇と日本の扇が中国に現れたということができる。では、高麗扇と日本扇はどのような関係にあるのか。

南宋趙彦衛『雲麓漫談鈔』「今人用摺扇……盖出于高麗。」北宋の郭若虚『画見見聞志』巻六「高麗国」

（高麗国）使人每至中国、或用摺疊扇為私親物、其扇用烏青紙為之、上畫本国豪貴、雜以婦人、鞍馬、或臨水、為金沙灘暨蓮荷花、木水禽之類、点綴精巧、又以銀泥為雲氣月色之状、極可愛……

高麗扇と倭扇の関係については、北宋の郭若虚は『画見見聞志』にて「これを倭扇という。本より倭国に出づるなり」と明言した。郭若虚は宋の時代の文人であるため、彼の記述は信憑性が高いと思われる。

郭若虚『画見見聞志』巻6「高麗国」

（高麗国）使人每至中国、或用摺疊扇為私親物、其扇用烏青紙為之、（中略）謂之倭扇、本出于倭国也。近歳尤秘惜典客者、蓋稀得之。

高麗の扇は倭国に出づるなり、また倭扇の名がそのまま引用されていることから、倭扇の歴史が高麗より長いということが読み取れる。烏青紙の色は蝙蝠扇の色であり、扇面の絵画も大和絵の特徴と似てい

ることからは、高麗の摺疊扇は日本扇を模倣或いは輸入したものと考えられる。

北宋宣和六年（一一二四年）使節として高麗に出た徐兢は高麗での見聞を記し、『宣和奉使高麗図経』巻29「供張」に高麗の畫摺扇について、「麗人は之を能くせず、是れ日本の作る所と云う。其の饋る所の衣物を觀るに、信に然り。」と書かれる。

畫摺扇 金銀塗飾 復繪其國山人馬 女子之形 麗人不能之
云是日本所作 觀其所饋衣物 信然

また、明代に入っても、高麗の摺扇の製作は日本に及ばず、日本天皇は扇を李氏朝鮮国王に贈る土産とした。釈周鳳『善隣国宝記』に記録した供奉リスト：永享十二年、彩画扇壹佰把……文明四年、別幅装金屏風式張、彩画扇式佰把……文明七年……扇壹佰把。日本扇を土産として高麗に贈るという点からみれば、日本扇の品質水準は高麗より精巧であったと推測できるだろう。

また日本の研究者の間でも、扇の起源が高麗とする説は、日本製の扇が高麗製とあやまって認識されたためだろうという主張が存在する。つまり、日本の扇が高麗に伝わって、さらにそれが中国に流入したと考えられるのである。

四 中国における摺扇の普及

中国では北宋になって、折り畳み式の扇が舶来品として日本や朝鮮

から伝わってきたと考えられる。明の陳霆『兩山墨談』巻18には「宋元以前 中国未有摺扇之製」とある。明の陸深『春雨堂隨筆』には「摺疊扇は聚頭扇とも言われ……北宋から現れた……東夷より出でる」とある。

今世所用摺疊扇 亦名聚頭扇 吾鄉張東海先生以為貢於東夷
予見南宋以來詩詞 咏聚扇者頗多 予收得楊妹子所寫絹扇面 摺
痕尚存 東坡謂高麗白松扇 展之廣尺餘 合之止兩指許 正今摺
扇 蓋自北宋已有之 倭人亦製為泥金面 烏竹骨充貢 出自東夷
果然

一方、団扇が中国において発明されたことを前提として、折り畳み式の摺扇も中国に由来するとする説があるが、筆者はその論拠は十分ではないかと考えている。摺扇が中国に起源するという主要な論拠としては『南齊書・劉祥伝』と明の方以智『物理小識』の文献が挙げられているが、いずれも妥当性が欠けると思われる。

なかでも、摺扇が中国に起源するという有力な論拠として、中国の史書『南齊書・劉祥伝』の以下の記録がある。

司徒褚淵入朝、以腰扇障日。祥从側過、曰：「作如此舉止、羞面見人、扇障何益？」

この文に出現する「腰扇」に関する解釈は、胡三省によると、「腰扇」とはいわゆる「摺疊扇」であるとされる。

『資治通鑑』卷135 齊高帝建元二年

「淵入朝以腰扇障日」元胡三省注「腰扇、佩之于腰、今謂之摺疊扇。」

清代の錢泳『履園叢話』卷三「考索・扇」にも同じような観点での注記が見られる。

『通鑑』「司徒褚淵入朝、以腰扇障日。」胡三省注云「腰扇、佩之于腰、今謂之摺疊扇。」則隋唐時先有之矣。

胡三省のつけた注記が妥当であれば、摺疊扇は南齊時代には既に使用されていたと考えられが、胡三省の注記に対しては、疑問も指摘されている。清の桂馥は『札僕』卷四「腰扇」に「腰扇如腰鼓、謂中腰瘦減、異於团扇」と指摘した。つまり、腰扇というのは、腰にかけた太鼓のような形であり、真ん中の部分が縮まり、团扇と異なるものである」と解釈している。周一良は桂馥の説を引用し、『魏晉南北朝史札記・腰扇』に「桂説是也。摺疊之扇自北宋時始傳入、南北朝時尚未有之。」と桂馥の見解を肯定している。

実は「腰扇」というものがいつ頃から現れたのか。確実な論証はないが、南齊以前にはすでに存在したようである。例えば、晋の陸雲『与兄平原書』

一日案行并視曹公器物，床荐席具，有……扇如吳扇，要扇亦在。

文中の曹公は即曹操を指す。「要」は腰の本字、要扇、つまり腰扇である。晋の張敞『東宮旧事』

（晋）皇太子初拜，供漆要扇、青竹扇各一、納妃同心竹二十、单竹扇二十。

ここからは漢末及び魏晉時期には腰扇がすでに使われていたことが分かる。また、南齊においては、折り畳みの扇に関する文献、絵画などの記録はほとんど残っていないため、胡三省の注記の根拠となるものが見当たらない。このことから、胡三省の注記をもって、折りたたみの扇が存在したことを証明するのは妥当ではないと考えられる。これに対して、清の趙翼は『陔余叢考』において、胡三省の注について「胡三省蓋後世之物妄為附会耳。」と批判した観点を取っている。

もう一つ、中国の唐代から摺扇が現れたとする論拠としては、明の方以智『物理小識』卷8『器用・宮扇』があげられるが、扇に関する解釈は折り畳み式の扇か团扇かは明言されていないため、断言することはできないだろう。

摺疊扇貢於東夷、永樂間盛行。智按：孫緬『韵』注「摺、（音同抽）扇。」即唐人已有矣。

方以智は、孫緬の『唐韻』に基づいて、唐には扇があったと解釈している。しかし、唐の孫緬によって書かれた『唐韻』は明代には、すでに散逸してしまった。紀元十一世紀、宋真宗の詔を受け、陳彭年ら

は唐代から残された『切韻』、『唐韻』などの韻書を参考とし、改めて『広韻』を編纂した。『宋本広韻・有韻』によれば、「搨、扇別名」と解釈している。これが折り畳み式の扇か団扇のいずれを指すのかは明言されていない。たとえ折り畳みの扇であったとしても、宋代に扇があったことは証明できるが、唐代に扇があったかどうかは証明できないだろう。

折り畳み式の扇が中国起源であると主張する観点について、文献や実物からそれを証明するものが今のところ確認されておらず、中国起源の論拠は不十分だと考えられる。また、舶来品として、北宋に流入した摺扇が明代に入って、流行するようになったことについては多くの文献から確認することができる。

馮時可『蓬窓續録』では「聚頭扇が永楽年間わが国に盛行する…倭人より製するとされている。利馬竇より倭扇四柄もらった。」と記録した。

聚頭扇即摺疊扇貢於 永楽間盛行于国 東坡謂高麗白松扇
展之廣尺餘 合之只兩指 倭人所製 泥金面烏竹骨 即此 余至
京有外国道人利馬竇贈于倭扇四柄 合之不能一指 甚輕 而有風
又堅緻

このような合すれば一指も足りず、軽くて便利な扇は民間に急速に普及し、流行するようになった。また、永楽年間には中国でも多く模倣され製作されるようになった。

明の陸容『菽園雜記卷五』では「因朝鮮国進松扇 上喜其卷舒之便

命工如式為之」と記録されている。

摺疊扇一名撒扇 蓋收則摺疊 用則撒開 或寫作筆者 非是
箒即団扇也 団扇可以遮面 故又謂之便面 觀前人題詠及圖畫中
可見已 聞撒扇自宋時已有之 或云 始永楽中 因朝鮮国進松
扇 上喜其卷舒之便 命工如式為之 南方女皆用団扇 惟妓女用
撒扇 近年良家女婦 亦有用撒扇者 此亦可見風俗日趨於薄也

明劉元卿『賢奕編』においても「上喜其卷舒之便 命工如式為之」ということが述べられている。

摺疊扇一名撒扇 蓋收則摺疊 用則撒開 永楽中、朝鮮進撒扇
上喜其卷舒之便 命工如式為之 南方婦女皆用団扇 惟妓女用
撒扇 近年良家女亦用之矣

摺扇が北宋時代に中国に流入し、中国で模倣され、明代に大量製作されるようになったことと時を同じくして、扇は中国の文化に浸透し、とりわけ、中国伝統劇曲と密着するようになった。中国の京劇、川劇、昆劇など伝統劇曲において、扇は舞台の道具の一つとして大きな芸術的効果を發揮するようになった。

五 日本扇から唐扇へ

北宋に中国に伝わった扇はそこでまた大きく変化する。それまで片面にだけ貼られていた紙が、中国において紙が両面に貼られるスタイ

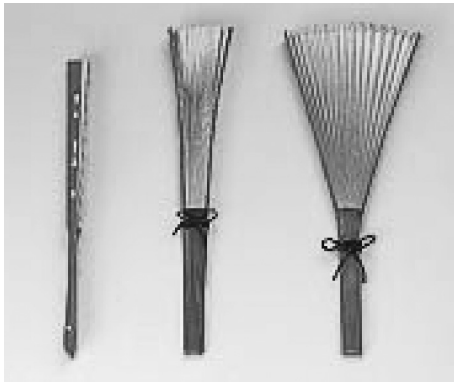


図5 日本扇3型式 | 左から鎮折、雪洞、中啓（末広）

図6 扇の伝播と創造

伝播のルート	時代	扇の種類
中国	中国・太古代	舜 五明扇
中国→日本	中国・隋唐	団扇
日本	日本・平安時代	檜扇
日本	日本・平安時代	蝙蝠扇
日本→中国	中国・北宋	折疊扇
高麗→中国	中国・北宋	折疊扇
中国→日本	中国・明	唐扇
日本	日本・室町時代	末広、雪洞、鎮折
日本→中国	中国・明	貢扇

ルに変化したのである。扇骨の両面に扇紙を貼り、表裏両面とも扇骨が露出しない形式が生じたのである。中国で変化を遂げた扇子は、室町時代に「唐扇」として日本に逆輸出され、その様式が日本の扇子にも使われるようになった。また、閉じた扇子の先端のかたちによって、「末広／中啓」、「鎮折」、「雪洞」の3型式という現代の日本の扇子の基本となる形式が確立されたのである。

さらに、日本では「唐扇」の特徴を取りいれながら、扇面に日本画を描くなど、ふたたび扇の形式を改良し、洗練された「貢扇」を明との勘合貿易の商品として、大量に中国へ輸出したのである。

其の後、扇は日本の能や狂言、茶道においても必須のものとなっただけでなく、江戸時代になると庶民の日常生活に使われるようになった。もともと中国から伝入した団扇・木簡などを元に、幾度も改造を

重ねられてきた日本扇は、現在では日本人の人生の節目において欠かせない重要なものとなった。生後約一ヶ月の初めての宮参りで、土地の守護神へ扇を奉納することに始まり、三歳、五歳、七歳の祝事の神詣や初老、半白、還暦、古希などの節目を祝う際など、人生の節目ごとに扇子との付き合いがあり、それが一生続く場合もあるのである。

扇という小さな器具は、中国、日本、朝鮮など東アジア諸国において、幾度も模倣・改良・変形され、伝承されてきたものである。文化や技術とともに伝えられた扇は、単に模倣され、利用されるだけでなく、それぞれ独自の発想を加えたうえで、また他国へとつたわってきただけである。以上のように扇の発明と発展は、東アジアの文化が創造—模倣—再創造というプロセスを繰り返し、その伝承と創造の過程において、融合とインタラククションが調和よく実現されてきた一つの事例として、非常に興味深いものといえるだろう。

注(1) 米山俊直 谷泰編 『文化人類学』世界思想社

二〇〇五年 七頁

(2) 出所…奈良文化財研究所 木簡データベース

(3) 狩野 久「古代木簡概説」『日本古代木簡』岩波

書店 一九九〇年 二二七頁